どうだった？ 大阪・関西万博のごみ削減の取り組み

Refill Japan 運営事務局 / 水 Do! ネットワーク
瀬口亮子

2025 年 4 月 13 日に開幕した大阪・関西万博は、約 2557 万人の来場者を得て、10 月 13 日に閉幕しました。

開催にあたっては、持続可能な運営に向けた「EXPO2025 グリーンビジョン」が発表され、廃棄物分野では、リユース、バイオプラ導入によるプラスチックの削減とリサイクル、食品ロスの削減とリサイクル、デジタル化等による紙の削減、施設設備のリユース等が策定されました。

さまざまな対策の中でも、特に今回の万博では、給水機の設置、リユース食器の導入など、私たちの活動に直接関わる取り組みも行われていたため、6月下旬に、Refill Japan として、現地調査を行いました。その概要をその後の追加情報を含めてご報告します。

給水スポットがたくさん

給水機はそもそも水分補給のために設置されるものですが、その利用により、ペットボトル等の使い捨て容器入り飲料の消費を減らし、ごみおよび CO_2 排出量の削減につながります。Refill Japan は、大阪・関西万博の開催が決まった当初から、会場内に多くの給水スポットを設置することを関係者に働きかけてきました。

そして、開幕した万博、Refill Japan のパートナー企業である OSG コーポレーション等の企業が、協賛として給水機を設置したこともあり、万博協会によると、74 か所に給水スポットが設置されました（マイボトル給水機、水飲み場、手洗い場等の合計）。主な設置場所は、万博協会公式サイトに掲載されたマップでも確認可能です。

実際に訪れた会場内では、大屋根リングの下や屋内休憩所を始め、さまざまな場所で給水機を確認することができ、天候や場所によっては、水を求める人々が行列を作っていました。一番使われている給水機は、開幕からの2か月余りで 27 万回も使われていることがカウンターで確認できました。これは一般的な設置場所での数年分に匹敵するほどのハイペースです。

また、象印マホービンが設置したマイボトル洗浄機は、公開の場では初のお披露目で私たちも初めて利用してみました。空になったボトルとキャップを置くと、オゾン水によって、マイボトルが洗浄されます。吉野杉を使ったデザイン、目玉の動きや音声ガイダンスも楽しく工夫されています。

最も多くの給水機を設置した OSG コーポレーションによる閉幕後の発表では、半年間の会期中の同社設置分の給水回数は約 1206 万回、これによる CO_2 削減量は約 987 トンに相当するとのことです。

国内外でたくさんの給水スポットを見ている Refill Japan スタッフでも万博会場の給水スポット設置率は感動するレベルでした。ただしこれは、万博という千載一遇の機会だからこそ企業が「広告」として投資した成果です。街中でこれが当たり前の光景になるためには課題もありますが、イメージを提示することができたことだけでも大きな収穫だったといえます。

フードトラックは リユース食器の利用が出店条件

万博会場内には、パビリオン併設のレストラン、フードコートなど、飲食を提供している場所がたくさんありました。そのうち、フードトラック（キッチンカー）が営業するエリア 8か所（トラック 26 台）では、使い捨て容器による資源の浪費を回避するため、洗って何度も使用するリユース食器の利用が、出店の公募段階から営業の条件とされました。

Refill Japan では、6月の訪問時に、すべてのフードトラックエリアを回り、販売されているメニューと提供の際に使っている容器、リユース容器使用の掲示の有無、リユース容器回収ステーションの運営状況などを確認しました。

東ゲートを入って最初に目に入るエリアでは、バームクーヘンのパフェやドリンク類が、すべてリユースカップで提供

されていました。また、リユース容器の使用を案内するポスターがきちんと掲示がされており、回収ステーションではスタッフがにこやかに容器の回収に対応していました。未来社会のイメージを体験する万博の玄関にふさわしい光景です。

その他のエリアでも多くのメニューはリユース容器で提供されていましたが、メニューによっては使い捨て容器の利用も見られました。さらに、リユース容器を全く使用せず、使い捨て容器のみで提供で出店条件に違反しているといえるエリアもありました。

また、広い万博の会場内でリユース容器の回収ステーションがわずか6か所しかないため、購入後に他の場所に移動してしまうとリユース食器の回収場所が見つからず、やむなく最寄りのごみ箱（3R ステーション）に持ちこまれている場面も目にしました。

そして、せっかくのリユース食器の導入が、万博の公式サイトなどで多くの来場者に案内されていなかったことは残念でした。会期の終盤には出店条件の遵守が強化され、状況はある程度改善したようですが、最終的な利用数等などのデータはこの原稿執筆時点では発表されていません。

いろいろ課題は見えたものの、これだけの大規模イベントでリユース食器を導入したことは大きな一歩と言ってよいと思います。

リユース食器回収コーナー

ごみの分別システムは

今回の万博の会場内には、約 50 か所のごみ箱（3R ステーション）が設置されていました。ごみ箱のデザインは数種類ありましたが、分別の種類はいずれも以下のようになっていました。

① ペットボトル ② ペットボトルのふた
③ びん、缶 ④ プラスチック
⑤ 紙ごみ ⑥ 燃やすごみ ⑦ 燃やさないごみ
⑧ 飲み残し ⑨ 生ごみ・食品廃棄物

食べ残し、飲み残しを入れる箱があるのは大変よいと思いました。しかし、使用済みの使い捨て容器などは、「プラスチック」「紙ごみ」「燃やすごみ」「燃やさないごみ」のどこに入れるのか、わかりにくかったです。

ステーションによっては、係員がいて対応していましたが、いないステーションもありました。そして、一部のごみ箱にＱＲコードがついていて、分別案内のページを見られるようになっていますが、その場でわざわざＱＲコードで確認する人がどれだけいるでしょう?

また、国際イベントであるにも関わらず、ごみ箱の表記が日本語メインで外国語はひときわ小さな文字の英語のみ、というのは違和感がありました。

万博の試みを「レガシー」にするために

Refill Japan では、6 月の調査終了後、SNS やウェブサイトでその報告と改善の余地のある部分への提案を行いました。また、8月には、万博の資源循環分野の有識者会議の委員を招いて万博のごみ削減をテーマにオンラインセミナーを開催、ＮＧＯや有識者の連携による提言書の作成にも関わりました。

会期終盤に万博協会から発表された報告によると、8月末までの速報値で、来場者1人当たりのごみ排出量は179g。削減対策をとらなかった場合は 334g になると想定されていたので、対策の成果はあったといえるでしょう。

特にパビリオンでのノベルティの配布の禁止やデジタル化での紙の大幅削減の寄与は大きかったと思われます。

リユース、リフィルの成果については、閉幕後の最終的な集計をまとめた報告書に掲載される見込みです。

「未来社会の実験場」とされた万博は終わりました。万博での試みが、課題の検証も含めて、実際の社会でどのように生かされていくのか。それが実現したときに初めて私たちはそれを「万博のレガシー」と呼べるでしょう。

9 分別のごみ箱（3R ステーション）と
ごみ箱に貼られた分別方法の QR コード